

松本市文化財調査報告 No.37

推定信濃国府

—第三次調査報告書—

1985.3

松本市教育委員会

推定信濃国府

—第三次調査報告書—

1985.3

松本市教育委員会

序

推定信濃国府発掘調査は三年目を迎えました。過去2回にわたる調査結果をもとに国府の存在を探究すべく、昨年度に引き続き、木下・山中・桐原三先生に御指導願ひ、本年度は惣社から東に目を転じて、山辺地区の3箇所と山辺中学校改築工事現場をも加えて発掘調査いたしました。

その結果は本文に示すとおりであり、古墳時代末期の遺構に当たった他は、確実な遺構を捉えることができず、遺跡の範囲の確認にとどまったのみであります。

しかし、これらが次年度以降の調査の手がかりとなることは勿論であり、息の長い調査の一過程の記録として活用されることを期待するものであります。

終りに耕作中にもかかわらず発掘場所を提供下さった地主の方々、お忙しい中を御指導にお出で願った木下・山中・桐原先生ならびに、発掘に直接ご協力いただいた調査員、作業員の方々にあつくお礼申し上げ、序文といたします。

昭和60年3月

松本市教育長 中島俊彦

例 言

1. 本書は昭和59年10月11日から59年3月3日にかけて行われた、重要遺跡推定信濃国府第三次発掘調査報告書である。
2. 本調査は信濃国府確認緊急調査として、国庫・県費補助を受けて行ったものである。
3. 本調査は3地点を発掘調査したが、土地所有者、藤森 晋、笹平巻雄、早川伝雄三氏のご理解ご協力によって行えたものである。記して謝意を表する。
4. 本調査には木下良、山中敏史、桐原 健先生にご指導いただいた。記して謝意を表する。
5. 本書の執筆、編集は専ら神沢が行い、他に実測は吉田浩明、拓本、図整理は原 克江の助力を得た。
6. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。

目 次

序	
例言	
目次	
第1章 発掘調査に至る経過	
第1節 第1・2次調査の概要と調査に至る経過	1
第2節 調査体制	3
第3節 調査日誌	3
第2章 遺跡の環境	
第1節 自然的環境	5
第2節 周辺遺跡	5
第3章 発掘調査	
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	7
第4章 学習会の記録——国府に関して——	17
結び	

第1章 発掘調査に至る経過

第1節 第1・2次調査の概要と調査に至る経過

第1次調査は信濃国府推定地の一つで、惣社（伊和神社）西側の農林水産省蚕糸試験場第三桑園内を中心とした発掘調査と、発掘地点の東側および北側1kmあまりの範囲を表面採集した。その結果は、発掘調査では4軒の平安時代の住居址と土壇が5ヶ、礎群と溝などが検出されたが、出土遺物は土師器、須恵器の坏・甕・四耳壺などで、これが国府に関わるものかどうかの判断となる資料は得られなかった。一方表面採集では東地区の里山辺では広範囲にわたって主として土師器、須恵器が採集され、また北地区の本郷大村でも土師器・須恵器が多数表採された。国府が松本にあった時代は平安・鎌倉時代というので、これら遺物は同時期にあり、その点何らかの繋がりを感ぜさせ、今後の調査に資料を提供した。

第2次調査は第三桑園内の第1次調査地点より約50m北側の地点で、東西20m南北40mを調査した。その結果、遺構は平安時代後半の竪穴住居址2軒と巾1.5mあまりのコの字状に曲る溝および小ピット20本を検出した。その他、南側部分では第1次調査で検出されたと同様の一面に壁の続く部分が検出された。これらの遺構は全面的に浅く、地表下30～40cmあまりで耕作により壁面などは既に削平されていた。出土遺物は少量で完形の土師器坏1点の他は特記するものはない。

一方、分布調査は発掘地点の惣社第三桑園の東側1kmあまりの里山辺地区と北側2kmあまりの大村地区を中心として行った。その結果、須恵器・土師器片・中近世陶磁器、および石器類を採集したが、須恵器の大甕片、灰軸陶器の小甕が特記される程度である。地形的には標高610mのラインの道路両側の集落寄りの遺物の採集が目立った点である。

本年度はこれらのことをふまえて、前回までの第三桑園から離れて610mラインの東側における6丁四方の地割りの範囲内を調査することとした。そして、発掘地点を定めるために、山辺歴史大学の現地学習の一環として、範囲内での遺跡を調査した。その結果、遺物の採集量、過去の出土例などを合わせて後述の3ヶ所を発掘地点と選定した。また、範囲内における里山辺中学校校舎改築に伴う調査で遺構遺物の検出をみたことも今回調査の資料として活用することとした。

本調査は総額100万円で、そのうち国から50%、県から15%の補助を得、残り35%は市の負担である。各種届出、通知書類は下記のようなものである。

昭和59年1月7日 昭和59年度文化財関係補助事業計画書提出

4月25日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡

- 5月1日 同 交付申請書（国庫）提出
- 5月21日 昭和59年度文化財保護事業補助金交付申請書（県費）提出
- 7月6日 昭和59年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金交付決定（国庫）通知
- 7月18日 昭和59年度文化財保護事業補助金交付決定（県費）通知
- 10月5日 信濃国府確認緊急調査について通知提出
- 60年1月12日 埋蔵文化財取得届・同保管証提出
- 2月18日 埋蔵物の文化財認定について通知
- 2月19日 文化財関係補助事業実態調査



第1図 調査地点位置図（1：15,000）

第2節 調査体制

指導者	木下 良	国学院大学教授		
	山中 敏史	奈良国立文化財研究所主任研究官		
	桐原 健	長野県教育委員会専門主事(県史刊行会)		
調査団長	中島 俊彦	松本市教育委員会教育長		
調査担当者	神沢昌二郎	同	文化係長 日本考古学協会員	
	山田 瑞穂	奈川小学校教諭	"	
	西沢 寿晃	信州大学医学部助手	"	
	三村 肇	会社員	長野県考古学会員	
	山越 正義	生坂中学校教諭	"	
	横田 作重	農業	"	
	降旗 俊行	松本保険事務所職員	"	
	森 義直	大町高校教諭		
	事務局	平林竹夫(社会教育課長)	神沢昌二郎(文化係長)	百瀬清(主査) 熊谷康治、直井雅尚(主事) 高桑俊雄(囑託)
		協力者	藤森晋, 笹平巻雄, 早川伝雄, 山辺歴史研究会, 里山辺公民館, 立正佼成会, 朝倉忠兵, 峯村梅春, 松原法子, 武田睦恵, 野村愛子, 早川鈴子, 三沢元太郎, 山内 勝山崎治雄, 藤森住子, 藤森千代子, 滝沢智恵子, 田川美代子, 小笠原忠夫, 大山 修塩野寿夫, 小林米子, 浅輪有子, 土屋君子, 前田良平, 上平道子, 古田宜光, 佐々木定雄, 佐々木タマ, 中林清勝, 藤松栄一, 岩井輝吉, 吉田浩明, 石合英子, 原 克江	

第3節 調査日誌

59. 10. 11 (木) 薄曇 A地点(藤森晋氏葡萄畑)を発掘する。発掘に先立ち調査の概要説明。畑内の表面採集で少量の須恵器片採集。葡萄畑の北端を1m巾で東西に48mのトレンチ設定(T1)。 -20cm あたりで礎が出る。遺物2片出土。縄文後期土器底部及び古銭(洪武通宝)。参加者, 早川他計9名
10. 12 (金) 小雨, A地点の南西トレンチ掘る(T3)。全面(表土より)に1~0.5cmの粘土塊(焼けている)と少量の炭あり。他にノロ状の鉄滓多し。A地点の南東トレンチ掘る。(T2, T3より20m東)。参加者, 三村, 横田, 松原他計7名。
10. 13 (土) 曇, B地点(笹平巻雄氏所有地)の草刈り。野茨の蔓で作業に手間どる。参加者, 横田, 三沢他計5名。

10. 15 (月) 晴, A地点の測量。C地点(早川伝雄氏葡萄畑)の発掘開始。参加者, 横田, 松原他計17名。
10. 16 (火) 薄曇, A地点午前中直井によりT1の実測図とり。神沢, 滝沢平板測量, 等高線入れ。C地点掘り下げ。-60cmまで黒褐色土層。東西に走る巾40cmの溝検出。-80cmで巾1mあまりのゆるい溝状遺構が東西に続く(溝2本)。遺物少量出土(磨石, 土師器片)。参加者, 横田, 松原他計15名。
10. 18 (木) 晴, A地点トレンチ測図。C地点溝2本の間の石が不自然のため追究。参加者, 三村, 横田, 早川他計15名。
10. 19 (金) 曇, 小雨, B地点に4×20mのグリットをつくる。C地点のセクションどり。土手掘り上げ。参加者, 横田, 松原他計14名。
10. 20 (土) 小雨, 雨のため発掘中止。A地点P3まで石のレベリング。C地点の石測図。平板測量およびレベリングを直井が行なう。森先生地質調査。参加者, 森, 横田, 滝沢,
10. 22 (月) 晴, A地点の埋め戻し。B地点の掘り込み。C地点清掃。参加者, 横田, 武田他計15名。
11. 9 (金) 晴, B地点掘り下げ。5Gの東側を拡張。礫の面より土師器片出土。参加者, 三村, 横田, 野村他計12名。
11. 10 (土) 晴, B地点5G拡張。礫は自然堆積らしい。-25cmで土師・須恵器片出る。参加者, 早川他9名。
11. 20 (火) 晴, B地点測量。参加者, 滝沢
11. 21 (水) 晴, B地点測量。参加者, 滝沢
11. 22 (木) 晴, B地点測量。参加者, 滝沢
11. 23 (金) 曇, C地点測量。参加者, 滝沢
12. 13 (木) 晴, 木下, 山中, 桐原三先生による現地指導。A~D地点をみる。夜山辺教育文化センターで, 学習会開催。参加者多数。
12. 14 (金) 曇, 三先生を市内の国府推定地(県, 筑摩, 本郷)及び, 烏立, 神林遺跡他にご案内する。
60. 3. 2 (土) 曇, 小雨。B地点地層調査(地山まで掘る)および5Gの礎下を掘る。落込みあり。掘り上げ, 測図をする。参加者, 三村, 横田, 三沢他計4名。
3. 3 (日) 曇, B地点10G調査。生活面らしい。あとB地点埋戻し。参加者, 三村, 横田, 三沢他計5名。

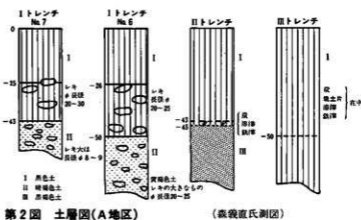
(なおこの間整理作業として報告書脱稿まで, 洗い, 注記, 測図, トレース, 写真等の作業があったが割愛する。以降校正, 現場撤収作業等の残務がある。)

第2章 遺跡の環境

第1節 自然的環境

今回の調査地点は松本市の東部にあり、東側に連なる筑摩山地の三峯山、美ヶ原付近から発する薄川と、三才山付近に源を発する女鳥羽川に近く、主として薄川の扇状地として発達したところである。堆積物は何回もの氾濫による押し出しで厚く、内材層の緑色凝灰岩、石英閃緑岩、玢岩、安山岩などの礫が多い。

調査地点周辺は葡萄畑が多く、畑作のために畑周辺に礫の出されたヤッコまたはヤツカと呼ばれる石の山ができており、いかにこの付近に礫が多いかを示している。特にA地区は北西に大きなヤッコが残り、東側道路がこの周辺では一番高く盛り上っているが、以前はそれ以上に大きいヤッコがあったということである。地層はA地区の例では第2図のように、地表下25cmあまりから礫があり、更に40cmあまりからは黄褐色土と礫の層になる。しかし同地区内でも僅か30cmあまり離れただけで耕土が深くなるなど、変化は激しい。地下水は低く、薄川より浸透した水は本調査地点より約1.5km西方の市街地東部で、湧水となって出ている。



第2図 土層図(A地区)

(森發直氏測図)

第2節 周辺遺跡

昭和59年9月6日に行なわれた山辺歴史大学(主催、松本市里山辺公民館)の資料をもととして記述するが、総社北東の6町四方に囲まれる範囲に限ってあるので、それ以外については、第一・二次調査報告書にゆずりたい。

第3図のDは山辺中学校敷地であるが以前より土師器の礫が出土している。2は中学校よりやや東北の葡萄畑で凹石や土師器片などを採集している。その東のAは凹石を採集。その北側の4では土師器・須恵器片50片余りを採集している。更に北へ行って5は10×20mあまりの狭い畑で、土師



第3図 分布図・周辺遺跡図

器・須恵器・灰釉陶器片を4と同量程度採集している。Bは北隣の峯村宅で水道工事の際出土したという、須恵器の提瓶があり、他に土師器の破片も出土している。7は早川伝雄宅敷地で土師器、須恵器片が出土している。Cは葡萄畑でもここでも土師器・須恵器が出土している。これらに加れば8では少量の須恵器片と中世以降の陶磁器片、9は土師器、須恵器、中近世陶磁器片を10片程採集している。これらの調査をふまえてA～Cを発掘調査することとし、Dについては工事に伴う調査ということで、併せてここに加えることとした。

第3章 発掘調査

第1節 調査の概要

今回の調査は惣社から山辺へかけての6町四方の範囲内に重点をおいて、A～Cの3地点と、山辺中学校改築工事に伴う調査もD地点として加え、計4箇所を調査した。その結果、国府を裏付ける遺構はなく、ただC地点において溝状遺構があったことと、D地点に古墳時代末期と思われる住居址を1軒検出したにすぎない。遺物はD地点でセットとも言える様相で土師器を10数点検出した他は、B地区で古墳時代の須恵器のすり鉢が出土した程度である。

しかし、B、C地点とも遺構の中心には当らなかつたが、出土遺物のあり方から発掘地点の周辺には何らかの遺構があるのではないかと思われ、今後調査の判断材料として役立つことと思われる。

第2節 遺構と遺物

1. A地点(第4図、第7図)

本地点は標高623mあまりの西にかなりの傾斜をもつ葡萄畑である。この畑はこの一帯では一番高く、南からも北からも盛り上った状態で、特に畑の北西側は土手状になっている。しかしこの周辺一帯は石の多い畑であり、この地の農家の人々の篤農によって畑の石を周囲に投げ出したヤッコである。本地点は以前より鉄滓片が出たり、畑の一部に水が吸いこまれる場所があるとの話を聞いていたが、作物の都合上、一部分を発掘調査した。

遺構 トレンチはI、II、IIIと設定し、Iは北端に巾1m、長さ48mのもの。IIは南寄りに4.3×1(一部1.5)mのもの。IIIは南西に4×1mとした。Iでは-25cmあまりで中層があり、-40～-50cmでは黄褐色土と礫の層になり、遺構はない。IIは水が吸いこまれるという地点であるが、別に何ら変化はなく、ただ耕土が深く礫がないだけで遺構はない。IIIは今迄に一番多く鉄滓の出土している地点で、地表から鉄滓片があり、焼けた粘土塊と鉄滓が出土したが、遺溝はなかった。

遺物 Iで縄文後期土器底部(網代底)と洪武通宝1、鉄滓多量。

2. B地点(第5図、第7図)

旧桑畑の荒地を調査した。北接して5mあまりのところて提版が出土しており、また南側50mあまりの畑からは土師器・須恵器片が表面採集される。

遺構 2×2mのグリットを設定したが、東側は2×4mのグリットになった。更に5Gでは東に約4×4mを拡張し、4Gも東側を僅か拡張した。遺物は-25cmあまりの黒褐色土層にあり、特

に北側にあるヤッコの近くでは $\phi 20 \times 10\text{cm}$ 大の礫がほとんど一面にあった。遺構として把握されるものではなく、ただ4・5Gに落込みが礫の下にあり、最大 170×140 、-30、最小 80×60 、-30cmの計5個の浅目のすり鉢状の落込みがあったが、落込み内の土は黒褐色土と黄褐色土とが混在して、攪乱の様相を呈していた。遺物は落込み上部に土師器片が少量あった。他に10Gでは-90cmで炭化物の層があり、それより僅か浮き上って7の土師器と18の須恵器があった。9Gとの比較では礫層のないことから10Gは明らかに落込んでおり、生活面と推定したい。

遺物 図示した23点の他に小破片を含めて330点があり、5G出土の遺物は断面が磨耗しているのを流されたものと思われる。3～7は土師器で、3は内黒の高台付坏、5は丸底の底部である。8～24は須恵器で、8、9が杯、9の底はへら切りらしい。10は坏蓋、11は長頸瓶の頸部を、つないだ部分、12・13は高坏脚部で12は二本の沈線がめぐる。14は瓶の頸部、15は罐状の頸部、16は瓶の底部で高台内は糸切り痕を残す。17はすり鉢で内面に磨耗痕があり、底面には削り底が顕著である。把手があったらしいが剥離している。18はタタキ目の甕。生焼けで赤っぽい。25は人形徳利である。

3. C地点(第6図、第8図)

A、B地点とはやや北に離れた葡萄畑で標高も618mと下ってくる。過去土師器の出土が近くであったときくし、直線距離70mの立正役成会北側でも須恵器を採集している。

遺構 葡萄の木をよけながら $5 \times 14\text{m}$ を掘った。全般的にみると-30cmあまりで礫面になる。特に東側は礫が浅く、東西に巾40cm-40cmと巾1m-60cmあまりの2本の溝がある。遺物は-20~-40cmまで土師器・須恵器の小破片があり、これも断面が磨れている。完形の坏と半分の坏が各1個あり、それは西側の溝の外側で地表下30-40cmである。この溝内には遺物はない。

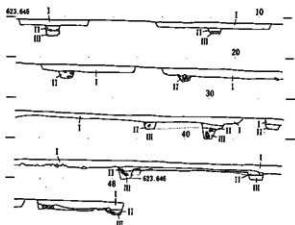
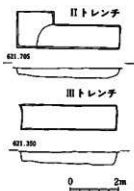
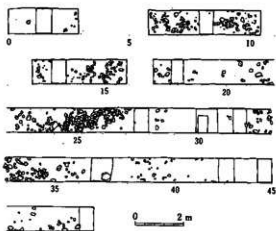
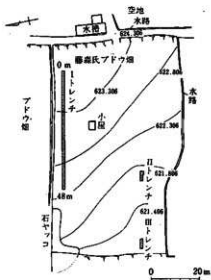
遺物 小破片も含めて220点が検出された。26-34は土師器で26、27は内黒坏で糸切底、28、29は高台付坏、30は高坏脚部、31は小型甕、32-34は甕底部である。35-53は須恵器で35-39は糸切底の坏、40-42は高台付坏で42は生焼けである。43、44は坏蓋、47は小型の底であるが内面が磨耗しているのあるいは17と同様のすり鉢かも知れない。

4. D地点(第6図、第9図)

山辺中学校敷地内の北西隅から平安時代の甕が出土しており、今回生徒用昇降口、管理人室等の建物のあった場所に棟を建設した。掘鑿時に立合った埴土器片を検出したので調査を行なった。

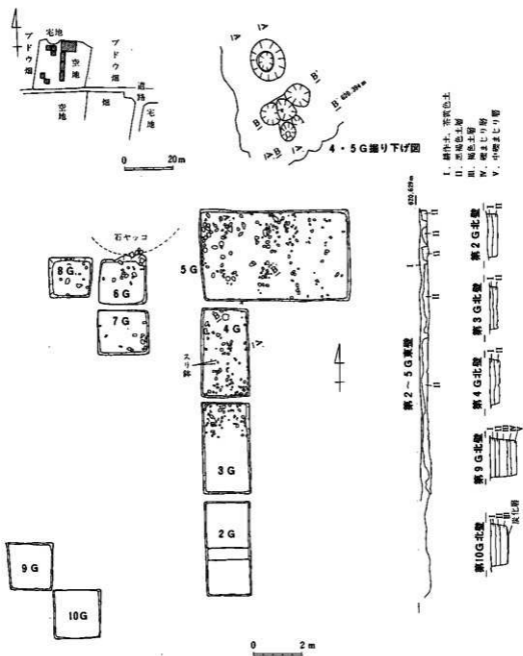
遺構 古墳時代末頃と思われる住居址を一軒検出した。部分的に切られていて完掘ではないが、推定で $3.5 \times 3.6\text{m}$ のほぼ正方形と思われる。炉址は不明であるが住居址内に中礫が入っており、土師器の完形のものなど13点に及んだ。ピットは西側に 35×35 、-8、 40×35 、-20cmの2本がある。

遺物 55-68まで図示した。他には小破片50点と客土層から出土した弥生後期土器片100点がある。55-58が杯、59は高坏の坏部、60は高坏脚部だが同一器体ではない。62-66は甕、68は砥石である。

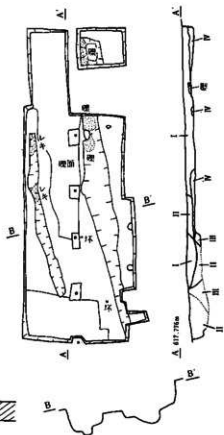


- I. 黒褐色土(耕作土)
- II. 暗褐色砂質土層(大小礫含)
- IV. 黄褐色砂質土層(大小礫多量)

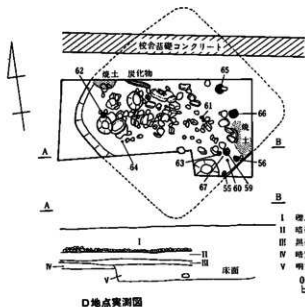
第4図 A地点範囲図・実測図



第5図 B地点範囲図・実測図

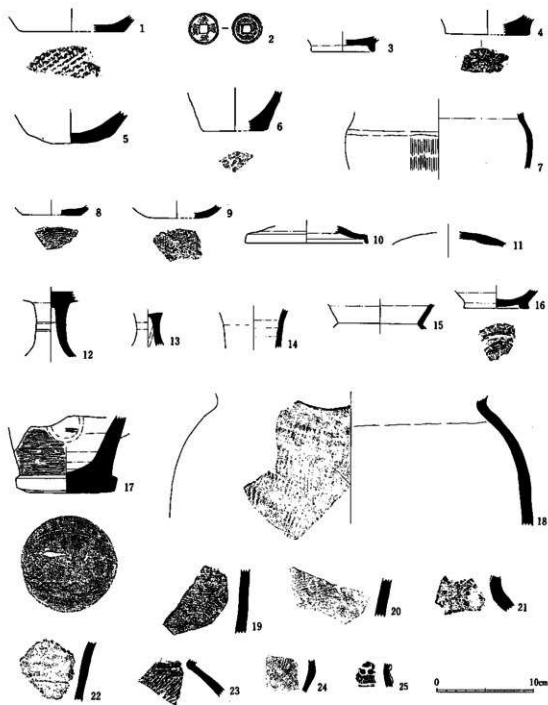


- I 耕作土
- II 掘乱層
- III 崩くしまった赤褐色土層
(0.5-1m大の小塊まじる)
- IV 砂乱層

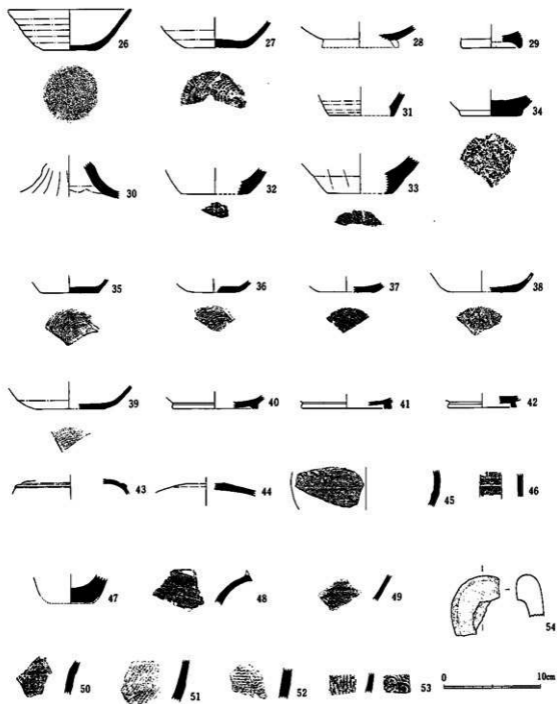


- I 埋および黒褐色土層
 - II 暗褐色土層
 - III 黒褐色土層
 - IV 暗黄褐色土層
 - V 明褐色土層
- 掘乱層

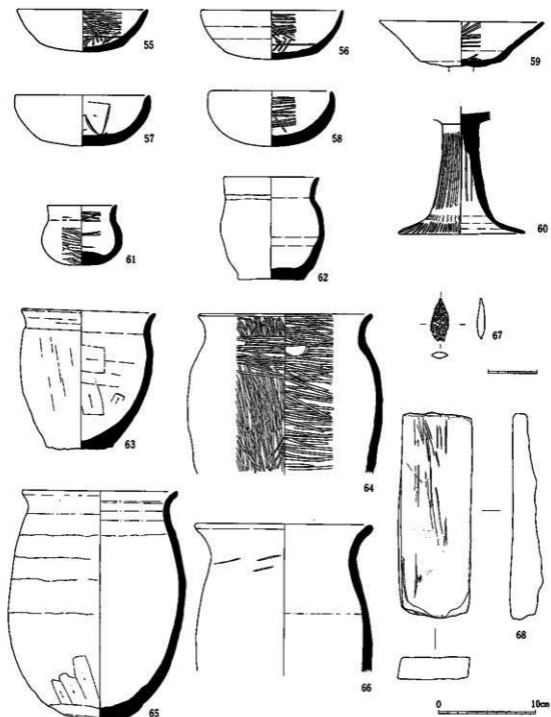
第6図 C地点範囲図・実測図・D地点実測図



第7图 A·B地点出土遗物实测拓本图



第 8 图 C 地点出土遗物实测拓本图



第9图 D地点出土遗物实测图

出土土器観覧表

土器番号 通物標記	出土 地点	種別	器形	口径	高さ	容量状態	色		成彩・調整・形態の特徴		胎土	焼成	備考
							外面	内面	内面	外面			
1	A	縄文土器 土師器	鉢	—	(10.8)	—	茶	茶	内面ヨコナギキ、外面ミナギキ、朝代底	小白色粘土	良	縄文前期	
3	B 5 G	土師器	杯	—	(6.4)	—	明灰茶	黒	内面、つげ高台	良	・	平安	
4	B 5 G	土師器	鉢	—	(8.6)	—	赤黒	茶	粗瀬なつくり、裏面はり出し	小石多し	・	・	鬼高新
5	B 4 G	土師器	鉢	—	7.0	—	黒	黒	丸底、底ヨコナギ、粗瀬なつくり	微粒砂含	・	・	・
6	B 5 G	土師器	鉢	—	(6.6)	—	赤茶	赤黒	木製底、外面仕上良	・	・	・	・
7	B 10 G	土師器	鉢	—	—	—	茶	茶	輪縁部、くし取工跡ナキ、内面ヨコナギ	良	・	・	平安
8	B 5 G	土師器	杯	—	(6.0)	—	青灰	青灰	米切底、内面ロウ成彩	小白色粘土	・	・	平安?
9	B 5 G	土師器	杯	—	(5.8)	—	・	・	外面ヘラミナギキ	・	・	・	奈良~平安
10	B 2 G	土師器	壺	(12.8)	—	—	黒灰	黒灰	外面タタキ、ヘズリ	良	・	・	平安
11	B 7 G	土師器	長頸瓶	—	—	—	薄茶赤	茶赤	外面自然焼、朝代、内面ナギ	小粒砂含	・	・	奈良
12	B 7 G	土師器	高杯	—	—	—	青灰	青灰	朝部二条の化境、内面ナギに調整痕	赤色粘土	・	・	古墳
13	B 5 G	土師器	杯	—	—	—	灰茶	灰茶	朝部二条の化境、内面放射状にしぼり	良	・	・	・
14	B 5 G	土師器	瓶	—	—	—	・	・	ろくろあとの内面自然焼	・	・	・	奈良~平安
15	B 5 G	土師器	瓶	—	—	—	・	・	口唇か上に黒く不明、外面面高自然焼	・	・	・	古墳
16	B 5 G	土師器	瓶	(6.8)	—	—	灰白	灰白	米切底つげ高台、底部内面自然焼	・	・	・	平安
17	B 3 G	土師器	すり鉢	—	10.2	—	青灰	青灰	底面ヘズリ、外面ハケ状土溝によるヨコナギ	白色粘土少	・	・	須磨器田 7 C 的 ~中瀬
18	B 10 G	土師器	瓶	—	—	—	茶	茶	内面底面、朝代、肥牛付底あり	良	・	・	酸化地焼
19	B 5 G	土師器	・?	—	—	—	薄茶赤	薄茶赤	外面タタキ目	小粒砂含	・	・	・
20	B 5 G	土師器	・?	—	—	—	・	・	外面タタキ目、19と同似	・	・	・	・
21	B 5 G	土師器	瓶	—	—	—	灰白	灰白	外面自然焼	良	・	・	・
22	B 5 G	土師器	瓶	—	—	—	黒灰	黒灰	外面ヨコナギ、断面磨耗	・	・	・	・
23	B 7 G	土師器	瓶?	—	—	—	青灰	青灰	外面タタキ目、穴をあげてのロブクリ	・	・	・	・
24	B 5 G	土師器	瓶	—	—	—	茶赤	茶赤	外面タタキ目、磨り不明、自然焼	・	・	・	・
25	B 5 G	土師器	樽	—	—	—	茶赤	茶赤	人形磨耗、水面大部分	・	・	・	・
26	B C	土師器	樽	(12.7)	5.3	4.2	全体 1/3	茶	米切底、内黒、ロクロナギ、輪い	・	・	・	瀬戸内遺存
27	C	土師器	樽	—	6.2	—	薄茶	薄茶	米切底、ロクロナギ、底部やや上る	・	・	・	平安
28	C 7 G	土師器	樽	—	—	—	黒	黒	米切底、内面ヘラミナギキ	・	・	・	・
29	C 7 G	土師器	樽	—	(6.0)	—	茶梅	茶梅	米切底、つげ高台	・	・	・	・
30	C 上土	土師器	高杯	—	—	—	茶梅	茶梅	外面タタキ目、内面ヨコナギ、断面磨耗	・	・	・	鬼高
31	C 1 G	土師器	小型鉢	—	—	—	茶梅	茶梅	外面ヨコナギ目	・	・	・	平安
32	C 5 G	土師器	瓶	—	(4.3)	—	・	・	木製底	白粒多含	・	・	鬼高
33	C 4 G	土師器	瓶	—	(6.8)	—	・	・	底近く輪縁部分不整形	白粒含	・	・	・

出土 品目	出土 品名	種別	形状	寸法 (cm)	保存状態	色		成形・調整・彩装の特徴	胎土	焼成	備考
						外	内				
34	B	C	土師器	環	口径 6.3	底径 5.8	茶褐色	粗製、底表面はつや、内面も胎土内ばり	小石多含	良	黒高
35	C	C3G	土師器	環	—	—	赤褐色	赤切底、内面盛鉢脚座痕、脚座磨耗	良	—	平安
36	C	C4G	—	—	—	—	赤褐色	—	—	—	—
37	C	C5G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
38	C	C3G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
39	C	C表径	—	—	—	—	—	—	—	—	—
40	C	C3G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
41	C	C2G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
42	C	C7G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
43	C	C表径	—	—	—	—	—	—	—	—	—
44	C	C3G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
45	C	C3G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
46	C	C5G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
47	C	C4G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
48	C	C表径	—	—	—	—	—	—	—	—	—
49	C	C表径	—	—	—	—	—	—	—	—	—
50	C	C8G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
51	C	C8G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
52	C	C1G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
53	C	C1G	—	—	—	—	—	—	—	—	—
55	D	DNo.6	土師器	環	13.5	8.6	4.3	全体 4/5	—	—	—
56	D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
57	D	DNo.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
58	D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
59	D	DNo.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—
60	D	DNo.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
61	D	DNo.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
62	D	DNo.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
63	D	DNo.10	—	—	—	—	—	—	—	—	—
64	D	DNo.2-5	—	—	—	—	—	—	—	—	—
65	D	DNo.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
66	D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第4章 学習会の記録 —国府に関して—

12月13日、指導者の木下良、山中敏史、桐原健先生に現地指導を得た。その夜三人の先生方にお願ひして学習会を開催した。それはかねてより先生方がお見えの際には、折角の機会であるのでは非お話を伺う場をつくってはしいとの希望があったためである。その夜会場の松本市教育文化センターには調査員、地元研究者、山辺歴史大学生ら60人あまりが参加した。会はまず事務局から第三次調査の概要を報告し、続いて桐原、山中、木下先生の順でお話いただき、最後にまとめて質疑応答を行なった。以下、先生方のお話をまとめてみたが、紙数の都合で言葉足らずになっているので、文意を正しく伝えられない点もあるかと思われる。お許し戴きたいし、文の責任も編集者にある。

◎東山道における信濃 桐原 健先生

- ・東山道とは東山道という近江、美濃、信濃、上野、下野、陸奥の国を含んだ地域の中を通る道。
- ・信濃国の道順は4世紀～5世紀頃は、神坂峠—天竜川筋—杖突峠か有賀峠—諏訪湖—茅野—白樺湖—佐久—碓井峠。8世紀～9世紀になると伊那谷までは同じだがあと—管知鳥峠—松本平—四賀—保福寺峠—青木—上田—佐久の道をとった。
- ・何故国府が移ったか、7世紀の後半頃から日本海側の対蝦夷政策で松本は根拠地のような性格を持っていたのではないか。為に8世紀の終り頃上田より国府が移り、道も廻り道になったのだろう。

◎国府と条里の地割 山中敏史先生

- ・国府とはもともと方八町というような明確な市街地を伴って出来たものではなく、いわゆる政府のまわりに幾つかの実務的な役所があったり、あるいは役人の住居がある部分等をだまかに取巻く範囲を国府として捉えていたのではないか。
- ・遺構・遺物で国府跡を判断する手掛りは、瓦の出土、建物の基礎跡検出などによる。
- ・条里の地割は大化改新以後、奈良時代までの間につくられたと考えられてきたが、実際に掘ってみると、平安時代から中世位にかけての例が非常に多い。

◎信濃の国府はどこにあるか 木下 良先生

- ・わからないので他の地方の例でみたい。(スライドによる説明)
- ・惣社について、国府の整備は8世紀であるが、惣社は11世紀後半頃からつくられ出す。因幡の国府だけ11世紀であるが、他は10世紀位で国府はわからなくなってしまう。だから惣社を基にして国府を探すのはあまり有望といえない。
- ・国分寺の場合も国府の場合も条里とはどこも関係ない。(出雲の場合はずれている)
- ・松本の今回とりあげたところも六町四方とみたが、最近の研究では方何町というのはおかしいということになり、私も自信がない。

結 び

今回の第三次調査は前回までの調査結果を踏まえて、標高 610m ラインの東側にある 6 町四方の道の内側（第 1 図、ネット部分）を調査した。その範囲内には前記周辺遺跡の存在が知られており今回の発掘調査でもある程度、遺跡の存在を裏付けてはくれたが、発掘面積が少い為か D 地点を除いて確たる遺構を検出できなかった。

まず A 地点であるが、この北側の土手状の高まりの線が、惣社の森の北東に当り、あるいは国府の周囲をめぐる土塁ではないかとの推測もあったが、それは石ヤッコであり推測ははずれた。また鍛冶場の存在を示す鉄滓については、精密に分析した訳ではないが、外面の所見では溶融の仕方が高温であり、平安・鎌倉時代ではそれ程の温度に上げることができなかったと思われるので、国府に関連づけられない。（森義直氏指示）

毎回問題になるものに礫がある。今回も A～C 地区共耕作土直下に 10～30cm 大の礫が、部分的には一面にあった。これが人為的なものか否かの問題であるが、人為的とみる者は洪水による堆積ならば細粒の土砂も共にあるべきとの考え方である。A 地区では礫に混じって縄文土器片と古銭（洪武通宝、初鑄 1368 年）が 1 枚あっただけで、その下層は明らかに自然堆積の土砂と礫が存在している。人為的としたならばそれを裏付けるものが少ない点、未だに結論を出せないでいる。

B 地点ではヤッコ寄りのグリットには礫があった。ヤッコは外観では積石塚と判別がつきにくくここでは古墳ではないとみているが、その近くから古墳時代の遺物が出土しているので、この周辺に住居址か古墳が存在していてもおかしくない状態である。B 地点の礫はヤッコに近い程濃密に分布しており人為的である。各グリットを掘り込んで地山を追求したところ、10G 以外は -70～-100cm で礫層になった。10G は炭化層、遺物の出土状況からみて生活面と思われる。4・5G の礫の下には落込みがあったが、落込み面の直上には 5cm 程の小砂利層もあり氾濫による押し出しより古いものではあろうが、落込みの性格はわからない。

C 地点では 2 本の溝状遺構があった。ここでも礫の面があったが砂礫限りで自然堆積である。溝についても北側の溝は消えかかっており、南側も溝巾が不揃で自然にできた溝であろう。遺物は完形坯も含めてやや磨れており、これも近くより流されたものと思われる。

D 地点では地表下 1m あまりに住居址があった。これら全般的にみた場合、国府を推定するにはあまりにも資料不足である。今回の調査も過去 2 回の調査結果とも合わせて考えた場合、疑問点を解明して一つ一つ消えしながら、点を広げて面としてゆく地道な方法を採用してゆくしかないと思われる。近々山辺地区内においても圃場整備が行われる予定であり、それに伴って事前調査が行なわれるので、それらにも期待をかけたが、広い観点に立って見直すことも必要と思われる。

圖 版

図版1 A、C地点出土遺物・D地点客土中の遺物



A地区
1, 2



B地区



B地区



B地区
17



D地区
客土中の
弥生土器



C地区
26



27



C地区



C地区



C地区

図版 2 D地点(山辺中学校)出土遺物

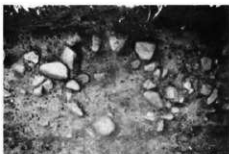


図版3 A地点発掘状況

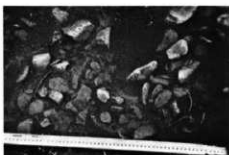
発掘開始



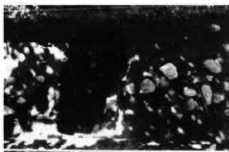
礫検出状況



礫検出状況



礫検出状況



A地点より北西をみる



Iトレンチ



Iトレンチ掘上げ



埋戻し作業



図版4 日地点発掘状況



観測り



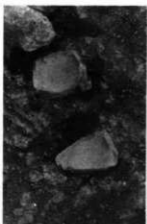
全景



ヤツコと618G



機検出



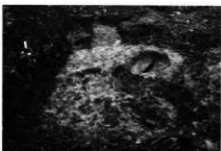
すり鉢出土状況



215G



埋戻し作業



落込み検出



埋戻し完了

図版5 C地点発掘状況



発掘開始



発掘状況



発掘状況



作業断面



北側溝検出



溝の連続



掘上げ全層(兼より)



増設した作業

図版 6 D地点発掘状況・現地指導



D地点発掘状況



D地点遺物出土状況



記念撮影・C地点



現地指導・B地点



現地指導・あがた遺跡

松本市文化財調査報告No.37

—推定信濃国府第三次調査報告書—

昭和60年3月28日 印刷

昭和60年3月31日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 アサカワ印刷機

